



Title	ウィトゲンシュタインの「メタロジカル」とは何か
Author(s)	奥, 雅博
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2005, 31, p. 111-124
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/9372
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

ヴィトゲンシュタインの「メタロジカル」とは何か

奥 雅 博

目 次

1. はじめに、問題の所在
2. 文献学的処理の問題点
3. テキストの鳥瞰
4. テキストの鳥瞰から得られる結論
5. 補 論

Wittgenstein の「メタロジカル」とは何か

奥 雅 博

1. はじめに、問題の所在

『論理哲学論考』を唯一の例外として、Wittgenstein が生前その哲学的著作を完成させず、多くの遺稿を残したことが、研究者に多くの問題を提起している。ごく限られた用例から大胆な結論が引き出せるか否かが、問題の一つの種類である。Hilmy の「メタロジカル」を巡る主張はこの好例である。

Stephen Hilmy, *The Later Wittgenstein*, Blackwell, 1987 の第2章は、「メタ論理と論理の領域、日常言語への移行」(Metalogic and the Domain of Logic: the Shift to Ordinary Language) と題されている。Hilmy は43ページで、「Wittgenstein が「メタロジカル」を非難するとき、それは殆ど変わらずに「心理的概念」と呼んでよい事柄の議論との関連で、その文脈でなされていることを人は見出すであろう。」と述べ、Wittgenstein の後期への転換点を極めて早い時期に設定する彼の主張ともあいまって、「メタロジカル」を重要なキーワードに仕立て上げている。しかしながら、彼の主張はその後吟味を呼ばないままに現在に至っている。例えば、David Stern, *Wittgenstein on Mind and Language*, Oxford UP, 1995 にも Alice Crary and Rupert Read (eds.) *The New Wittgenstein*, Routledge, 2000 にも「メタロジカル」は索引に見出されない。この問題の吟味が本論の課題である。

念のために付言すれば、これ以前に「メタロジカル」という語が哲学の文献に登場しなかったわけではない。例えば、Hans Lenk, *Metalogik und Sprachanalyse: Studien zur analytischen Philosophie*, rombach, 1973 という書籍があるが、「メタ論理」はここでは格好良い語句として使用されているにすぎず、何ら積極的な内実を与えられていない。

2. 文献学的処理の問題点

Hilmy の主張の当否の吟味を困難にしていた大きな理由は、Blackwell から出版された書物では「メタロジカル」が三箇所しか登場しないことにある。即ち、『哲学的文法』に二箇所、『断片』に一箇所である。(元原稿を Fon • Lightナンバーでリファレンスすると、それぞれ MS 114-084, MS 140-008, TS 233a-058 である。) これだけの素材では、十分な議論は困難である、と言わざるをえない。

他方、ヒルミーは前掲書で未公刊のヴィトゲンシュタインの遺稿を駆使している。遺稿の利用が穩当なものであるか、それとも先入見と情熱故にバランスを欠いているか、この吟味のためには用意周到な遺稿の熟読が要求される。このことが、文献学的素養を持つヴィトゲンシュタイン研究者といえども、吟味に二の足を踏ませる理由であった、と推測される。

しかし、2000年にベルゲン大学ヴィトゲンシュタイン・アーカイブズが作成しオックスフォード大学出版局が販売するデータベース(*Wittgenstein's Nachlass The Bergen Electronic Version*)が完成するに及び、事態は変貌した。従前はコーネル・コピーを一枚ずつ読んでいく他なかったが、現在では検索をかけると、「メタロジカル metalogisch」およびそれと語根を等しくする表現が登場する覚え書きはヴィトゲンシュタインの遺稿に37箇所残されていることが判明する。もとより、若干の修正を含む転記、同一のタイプ原稿のコピー等の重複があるので、実質的内容の異なる覚え書きはそれより少ない。私の考えでは、10のグループに整理できる。以下、初出の年代順にテキストを提示し、覚え書きを鳥瞰する。第1のグループのテキストの提示と最小限の日本語訳を示した後に、ヴィトゲンシュタインによる覚え書きの推敲、死後の遺稿の整理と出版について文献学的なコメントを述べることとしたい。

3. テキストの鳥瞰

* 第1のグループ

MS 110-160 (1931), TS 211-228 (1932?), TS 212-801, TS 213-282 (1933?)

In gewissem Sinn bringt uns das nicht weiter. Aber es kann uns ja auch nicht weiter, d.h.[,] zu dem Metalogischen [//einem Fundament//], bringen.

MS 114-084 (1933?)

"Ich schreibe hierher die Zahl '16'

x	1	2	3	4
x^2				16
x^3				64

weil dort ' x^2 ' steht und hier '64' weil dort ' x^3 ' steht". So sieht jede Rechtfertigung aus. In gewissem Sinne bringt uns das nicht weiter. Aber es kann uns ja nicht weiter, d.h. zu dem Metalogischen bringen.

MS 114-084 の試訳を示す。

「私はここに数 '16' を書く。何故なら、反対側に ' x^2 ' とあるからである。'64' を書く。何故なら、反対側に ' x^3 ' とあるからである。」正当化はいずれもこのように見える。そのことは或る意味で我々をより先にもたらしはしない。ところで、そのことは我々を

「より先に」、即ちメタロジカルな事柄へと、もたらすものでは決してありえない。

MS 110 云々は「フォン・ライトナンバー」と呼ばれる遺稿の整理番号である。その後の括弧書きは原稿が記された年である。このグループを例にとりウィトゲンシュタインの作業を大まかに説明すると、まず MS 110 と付番されたノートに彼は手書きで覚え書きを記す。それをタイプライターで清書したのが、TS 211-228 である。これから切り抜きを作り、他の原稿からの切り抜きとともに配列し直したもののが TS 212-801 であり、TS 212 を清書したのが、TS 213 いわゆる'Big Typescript' である。当然ながら、推敲の過程でテキストにバリエントが生じことがある。このグループの覚え書きに関しては metalogisch と Fundament の併記は TS 213 まで続いている。

TS 213 は『哲学的文法』の底本であるが、ウィトゲンシュタインがその後、MS 114, MS 115 に TS 213 の最初の部分の推敲原稿を記し、冒頭部分については MS 140 で再度推敲が重ねられている。出版された『哲学的文法』では、より後の推敲が優先されしており、我々は MS 114 のテキストを『哲学的文法』で目にしているのである。なお、引用文の前に「ここでは、「何故なら」が、理由ではなく原因の陳述の導入とみなされている。」という条がある。

MS 114 の覚え書きが『哲学的文法』第1部61節に含まれている。

第2から第4のグループは、MS 110 の 189 から 194 という短期間に記されている。

* 第2のグループ

MS 110-189 (1931), TS 211-242 (1932?), TS 212-005, TS 213-001(1933?)

Wie es keine Metaphysik gibt, so gibt es keine Metalogik. Das Wort "verstehen", der Ausdruck "einen Satz verstehen" ist auch nicht metalogisch, sondern ein Ausdruck wie jeder andre der Sprache.

MS 114-002 (1933?)

Es gibt keine Metalogik. Auch das Wort "verstehen", der Ausdruck "einen Satz verstehen" sind nicht metalogisch.

前者の訳

メタフィジックスが存在しないように、メタロジックも存在しない。「理解する」という語、「ある命題を理解する」という表現もメタロジカルではなく、言語のそれ以外の表現と同じ身分のものである。

MS 110, TS 211 でこの覚え書きのすぐ前にある覚え書きは、「哲学は実際に語られることに決して抵触してはならないし、それ故結局はそれを記述できるのみである」で

始まり、「「数学的論理学の指導的問題」なるものは、他の問題同様数学の問題である。」で終わる覚え書きで、『哲学探究』124 節の一部となっている。「数学的論理学の指導的問題」との関連でいえば、「メタ数学が存在しないように、メタ論理も存在しない」と書かれていても良さそうであるが、「メタ論理」というヴィトゲンシュタインの表現とヒルベルトの「メタ数学」との関連は不明である。

なお、この覚え書きは TS 212 の配列で冒頭に移され、TS 213 もこの配列でタイプされているが、MS 114 でさらに上述の書き換えがなされる。MS 140 の再度の推敲ではこの部分が削除されたため、第 2 のグループは『哲学的文法』には登場しない。

* 第3のグループ

MS 110-191 (1931), TS 211-243 (1932?), TS 212-066, TS 213-016r (1933?)

Was heißt dann also der Satz: "Ich muß den Befehl verstehen, ehe ich nach ihm handeln kann"? Denn dies zu sagen hat natürlich einen Sinn. Aber jedenfalls wieder keinen metalogischen.

MS 114-015 (1933?)

Aber der Satz "ich muß den Befehl verstehen, ehe ich nach ihm handeln kann" hat natürlich einen guten Sinn. Aber jedenfalls keinen metalogischen. Denn auch das Verstehen ist kein metalogischer Begriff.

MS 140-008 (1934?)

Man könnte da fragen: Wie lange vor dem Befolgen mußt Du den Befehl verstehen? Aber der Satz "ich muß den Befehl verstehen, ehe ich nach ihm handeln kann" hat natürlich einen guten Sinn. Nur keinen metalogischen. -- Und 'verstehen', 'meinen' sind keine metalogischen Begriffe.

MS 116-021 (1936?), TS 228-004 (1945?), TS 233a-058

Der Satz: "ich muß den Befehl verstehen, ehe ich nach ihm handeln kann" hat natürlich einen guten Sinn, aber wieder keinen metalogischen.

MS 110, TS 211, TS 212, TS 213, MS 114, MS 140 という流れは、既に述べた通りであり、MS 140 の覚え書きが『哲学的文法』第 1 部 8 節に印刷されている。訳してみると

ここで次のように問うこともできよう。即ち、命令を遂行する以前にどれだけの長さ、君は命令を理解しなければ「ならない」のか、と。ところで、「命令に従って行為することができる以前に、私は命令を理解せねばならない」という文はもとより適切な意味を持っている。ただし、メタロジカルな意味ではない。——そして「理解する」「意味する、つもりである meinen」はメタロジカルな概念ではないのである。

ところで、このグループが何故再度 TS 233a を経て、『断片』284節にまで至るのか、一言しておくべきであろう。

ヴィトゲンシュタインは『茶色本』をドイツ語に訳すことにより主著を作り上げよう、と試みるが、この試みは1936年の夏に放棄される。その後に書き始められたノートがMS 116である。文面から見て、MS 140ではなくおそらくTS 213を参照しつつ、MS 116-021が記された。後に1945年頃『哲学探究』の最終版を準備するために、ヴィトゲンシュタインは以前の覚え書きから使えそうなものを抜粋してタイプ原稿を作った。これがTS 228であり、問題の覚え書きはTS 228に採録された。TS 228はスリップにされ、『探究』に採用されるものは消費されたが、不採録の殆どが『断片』として保存されたのである。

* 第4のグループ

MS 110-194 (1931), TS 211-245 (1932?), TS 212-1129 (1932?), TS 213-412 (1933?)
 Das Wort "fundamental" kann auch nichts metalogisches oder philosophisches bedeuten,
 wo es überhaupt eine Bedeutung hat.

「基礎的」という語がおよそ意味を持つところでも、それがメタロジカルな、ないし哲学的なことを意味することはありえない。

TS 213-412は、The Big Typescriptの「哲学」と題する章の通算88節に属している。『哲学的文法』をリースが編集した折りに、彼はこの章を収録しなかった。彼の編集方針の妥当性については議論がある。

* 第5のグループ

MS 153a-159v (1931)

Das ist nun damit in Zusammenhang daß es keine allgemeine Form der Regel gibt und nicht den Begriff 'Regel' als einen metalogischen Begriff (so wenig wie den Begriff 'Spiel'). Und daß ich darum nur einzelne Spiele beschreiben kann wie sie eben sind.

このことは、規則の一般概念が存在しないこと、メタロジカルな概念としての「規則」という概念が存在しないことと関連している。(「ゲーム」という概念についても同様。)そして、それ故に私は個々のゲームを現にあるがままに記述することしかできないことと、関連している。

MS 153aは小さなノートである。記載された内容と大判ノートのそれとを対比する

と、MS 110-213 から MS 112-115r に至る内容である。問題の覚え書きは大判ノートに採録されていないが、MS 112-112v にこれより前の覚え書き、これより後の覚え書きが採録されている。

(なお、153a-159v の v についてコメントする。一枚の紙に一つの番号が付されている場合、右ページを recto、左ページを verso と称する。153 と付番された 153r をめくると 153v となる。)

* 第6のグループ

MS 113-049v (1931-2), TS 211-600 (1932?), TS 212-618, TS 213-205 (1933?)

Wenn das Wort "Übereinstimmung mit der Wirklichkeit" gebraucht werden darf, dann nicht als metalogischer Ausdruck sondern //als Teil eines Kalküls, als Teil der gewöhnlichen Sprache// als Teil der gewöhnlichen, praktischen, Sprache. (TS 213)// Man kann etwa sagen: Im Sprachspiel "Licht!"[--] "Finster!" kommt der Ausdruck "Übereinstimmung mit der Wirklichkeit" nicht vor.

MS 115-085 (1934?)

Der Ausdruck "Übereinstimmung" gehört für uns nicht der Metalogik an, sondern dem praktischen Gebrauch unserer gewöhnlichen Sprache.

TS 213 を訳すと

「現実との一致」という語を使用して差し支えない場合、それはメタロジカルな表現としてではなく、日常の実際的な言語の一部としてである。例えば、「明」「暗」の言語ゲームでは「現実との一致」という表現は現れない、と言える。

MS 115 を訳すと

「一致」という表現は我々にとってメタロジックに属すのではなく、我々の日常言語の実際的使用に属するのである。

TS 213 では「計算」という語が登場しないように、「計算」が言語を考える折のモデルから消えていく過程が示されている。また、「明」「暗」の言語ゲームというのとは「電灯のオン・オフ」のみを答える言語ゲームである。なお、MS 115 のこのあたりは『哲学的文法』に収録されていない。

* 第7のグループ

TS 212-810 (1932?), TS 213-286 (1933?)

Das heißt, das Abbilden kann sich von einem andern Vorgang auch nur so unterscheiden, wie eben ein Vorgang vom andern und das heißt, daß dieser Unterschied //nicht logische Bedeutung haben kann// kein metalogischer Vorgang ist// [Abilden ist

kein metalogischer Begriff. (TS 213)]

訳してみる。

即ち、写像することとそれ以外の出来事ないしプロセスとの区別は、それ以外の出来事ないしプロセス同士の区別と異なるものではあり得ない。即ち、この区別は／論理的な意味を持ちえない。／メタロジカルな出来事ないしプロセスではない。写像するはメタロジカルな概念ではない。

ところで、「メタロジカル」という表現を含まないテキストは MS 109-292 (1931), TS 211-148 (1932?)に登場する。即ち、TS 212 で「メタロジカルな出来事ないしプロセス」が併記され、さらに TS 213 で最後の一文が付加されたのである。

なお、最後の一文に対応する覚え書きが MS 114-083 に一旦記されたが抹消されたので、この文脈での「メタロジカル」という表現は『哲学的文法』には登場しない。

* 第8のグループ

TS 213-003 (1933?)

Alles was ich in der Sprache tun kann, ist etwas sagen: das eine sagen. (Das eine sagen im Raume der Möglichkeiten dessen, was ich hätte sagen können.) (Keine Metalogik.)

私が言語でできることの全ては、あることを語ることである。この一つのことを語ることである。(私が語ることのできる事柄の可能性の空間でこの一つのことを語ること。) (メタロジックではない。)

「メタロジックではない」という表現は TS 213 で手書きで付加されたもので、これを含まぬ覚え書きは MS 110-001(10/Dec/1930), TS 211-148, TS 212-014 と辿ることができる。この一節は MS 114 での推敲に採録されなかった。後に、1936年頃、ヴィトゲンシュタインは MS 116 で TS 213 の見直しを始め、この覚え書きも MS 116-004 に登場するが、問題の手書き部分は採録していない。

* 第9のグループ

MS 114-027 (1933?)

"Ich meine aber doch mit diesen Worten etwas".

Gewiß: im Gegensatz zu dem Falle, wo ich nichts meine, wo ich etwa die Silben ihres komischen Klangs wegen aneinderreihe. (Der Satz "ich meine etwas...", nicht metalogisch.)

「だが何と言っても、私はこれらの言葉であることを意味する。」確かに。何も意味しない場合、例えば、音節同士に面白い響きがあるので並べてみた場合、との対比の話なら。（「私は・・・を意味する」という命題はメタロジカルではない。）

「メタロジカル」に関する最後の一文は MS 114 で付け加えられており、これを含まぬ形は MS 109-282, TS 211-142, TS 212-492, TS 213-156 とルーツを辿ることができる。MS 140 での再度の推敲でこの覚え書きは採録されず、それ故『哲学的文法』に登場しない。

* 第10のグループ

MS 116-002 (1936?)

Eine Versuchung, zu glauben, das Wort "verstehen", der Ausdruck "einen Satz verstehen", seien metalogische Worte.

MS 116-003 (1936?)

Eine Versuchung, zu glauben, die Bedeutung des Wortes "verstehen", des Ausdrucks "einen Satz verstehen", sei metalogisch.

"Verstehen" und "meinen" sind Worte wie alle anderen.

MS 116-016 (1936?)

Ich war lange versucht, zu glauben, "verstehen" sei ein metalogisches Wort.

二番目と三番目を訳してみる。

「理解する」という語、「ある命題を理解する」という表現の意味を「メタロジカル」である、と信じようとする誘惑。

「理解する」「意味する」は他の全ての語と同じ身分である。

私は、「理解する」はメタロジカルな語である、と信じようと、長い間努めてきた。

このグループは回顧録である。

以上が、テキストとその鳥瞰である。

4. テキストの鳥瞰から得られる結論

a) 「メタロジカル」という概念にウィトゲンシュタインがこだわったのは、1931年から1934年頃までである。

あくまでも現存している遺稿を手がかりとしての話であるが、「メタロジカル」とい

う表現が初めて登場するのは、1931年のMS 110であり、その後それ以前の覚え書きが推敲される折りに「メタロジカル」に関するコメントが付加されたりする。この傾向は第9のグループが示すように、The Big Typescriptの一回目の書き直しである1933年頃のMS 114まで続き、さらに第3のグループにあるごとく二回目の書き直しである1934年頃のMS 140でも踏襲されている。他方、1936年頃のMS 116(第10のグループ)はウィトゲンシュタインにとってアクチュアルな問題というよりは既に回顧録である。

b) 「メタロジカル」という発想はこれらの覚え書きで一貫して否定的な評価を受けている。

即ち、「正当化」「理解する」「ある文を理解する」「命令実行以前の理解」「意味する」「基礎的」「規則の一般形式」「現実との一致」「写像する」「ある言葉であることを意味する」、これらの事柄を「メタロジカル」と解してはならない、他の事柄とは異なる次元のものとして扱ってはならない、というコメントが繰り返される。

c) 「メタロジカル」の射程は適切に解明されねばならない。

まず、「メタ論理」という表現に惑わされて、一階の論理に対する高階の論理をモデルに解釈しようとする発想が見当外れであることは、テキストから明らかであり、改めて特に論じるまでもないであろう。

他方、ヒルミーのように「心理的概念」とそれ以上限定せずに述べるのも誤りである。「心の哲学」は後期ウィトゲンシュタイン哲学の主要な問題であるが、代表的なトピックである「他人の痛み」や「アスペクトの転換」はここにはその片鱗も存在しない。「メタロジカル」批判をキーワードに後期ウィトゲンシュタイン哲学の展開を構想するのは無謀である。ここでのウィトゲンシュタインの関心はより限定されている。

それでは、どのような見当をつけるべきであろうか。誤解を恐れずにいえば、カントの「超越論的論理学」とのアナロジーで考えてみることである。『論理哲学論考』の「論理」は、「任意の universe of discourse に対して適用可能な便利な言語的ツール」としての「一般論理学」として構想されたのではなかった。「論理が関わる」のは現にある唯一の世界であり、その世界に関して写像関係にある「言語と世界の双方に共通な論理形式」が問題とされた。また、「我々は世界の像を作る」と言われ、世界に対する相関者としての「哲学的自我」「形而上学的主觀」が考察の主題であった。私は『論理哲学論考』を「超越論的論理学」のウィトゲンシュタイン的バージョンとして読むことが可能である、と考えており、これが私の修士論文の一つの作業であった。(現在簡単に読めるものとしては、奥雅博『ウィトゲンシュタインの夢 言語・ゲーム・形式』(勁草書房、新装版、1998)所収の論文「世界像の哲学」における「存在論的区別」——「語られること」と「示されること」——を参照されたい。)「超越論的論理学」

は、「一般論理学」の可能性の条件を問うものとして、「メタ論理」なのである。

この方針も細部では難問に直面するかもしれない。しかし、これが唯一可能な読みである、と私には思われる。

ヴィトゲンシュタインはこの「メタロジカル」の誘惑にとらわれていたのである。

d) ヴィトゲンシュタインは「メタロジカル」の誘惑から徐々に解放された。

前期のヴィトゲンシュタインが、第10のグループが述べる「理解」「文の理解」「意味」をメタロジカルに解する誘惑にとらわれていたとして、彼がこの誘惑から解放されたのはいつであろうか。彼は1929年1月の終わりに再びケンブリッジで哲学に従事し始める。他方、「メタロジカル」という表現は、1931年のMS 110-160で初めて登場する。さらに、後に「メタロジカル」という表現が付加される第7から第9のグループの覚え書きが初めて記されるのは、MS 109-262, MS 110-001, MS 109-282である。この間、つまりケンブリッジに帰還後なおしばらくは、ヴィトゲンシュタインは「メタロジカル」な考え方を脱していない、というのが私の主張である。

このことを確認するために『哲学的考察』を見てみよう。『考察』はMS 105-107, MS 108の前半（1929年2月—1930年4月）の覚え書きのタイプ清書である。この冒頭には次のような主張が散見される。即ち

命題を、モデルを作るための指図書とみなすためならば、命題の像的性格は一層明瞭となることであろう。（10節）

命令を遂行する以前にその命題を理解する、ということは、行為を遂行する前にその行為を意志する、ということと同類な点がある。（13節）

命題と現実との一致は、この一致が記憶像と現在の対象との一致に似ている限りにおいてのみ、像と写像されたものとの一致に似ている。（19節）

言語から志向 Intention という機能が除かれるならば、そのことによって言語の全機能が崩壊するであろう。（20節）

志向、意図において本質的なものは像である。意図されたものの像。（21節）

この時期のヴィトゲンシュタインが、いわば「メタロジカルの神話」から解放されていないことは確かである。解放がどのようなプロセスを辿ったか、それを詳論するのは本論の課題を超えている。最後に、若干のコメントを残しておきたい。

5. 補論

a) 文献学的研究の意義について

「メタロジカル」という小さな概念に対するデータベースを使用したこのような議論

はウィトゲンシュタインの一般読者にとっては枝葉末節なことと写るかもしれない。ひいては一般読者向けの概観書を記すことを得意とする研究者が、この種の研究を些細なことと感じるかもしれない。私自身、ウィトゲンシュタインについて様々な書物が様々な角度から書かれるべきである、と思うし、ウィトゲンシュタインを論じる角度も極めて「主観的」なものから極めて「客観的」なものまで多種多様であって差し支えない、と考える。第一、決して安価ではないドイツ語のデータベースを参照することは、一般読者に要求する問題ではない。

他方例え、「市販されている『哲学的考察』と『哲学的文法』とは重複する覚え書きも含んでいますが一体どう違うのでしょうか」という質問は、一般読者にとって自然な質問である。これに答える概説書の著者は、自らのこれまでの読み込みによって様々な見通しを持っていることであろう。ただその見通しが単なる主観的な思いこみなのか、検証された主張なのかについては注意深くあるべきであろう。仮説をチェックするツールとしてデータベースは決して等閑視できないのである。

b) 講義録等に見られるコメントについて

ウィトゲンシュタイン自身の覚え書きではない講義録、聴講者のメモ等に「メタロジカル」についてコメントが見いだせないか、という課題がある。私は『ウィトゲンシュタインとウィーン学団』、ムーア「1930-33年のウィトゲンシュタインの講義」、リー編集『ウィトゲンシュタインの講義 1930-32年、ケンブリッジ』、アンブローズ編集『ウィトゲンシュタインの講義 1932-35年、ケンブリッジ』を通読した。その結果、『1930-32年の講義』に一箇所（原著84ページ、邦訳150ページ、1931から2年の学年度）、『1932-35年の講義』に一箇所（原著31ページ、邦訳59ページ、1932から3年の学年度）に見いだされた。趣旨はウィトゲンシュタイン自身の覚え書きと一致するものである。

付記 この論文の当初の構想は科学基礎論学会年会の第2日目（平成16年6月20日 聖心女子大学）で口頭発表された。この機会に寄せられたコメントに感謝したい。

What is the "metalogical" in Wittgenstein?

Masahiro OKU

1. In his *The Later Wittgenstein* Stephen Hilmy emphasized the important role of the concept "metalogical" in Wittgenstein's philosophy. Hilmy titled Chapter 2 "Metalogic and the Domain of Logic: the Shift to Ordinary Language"; and regarded the concept "metalogical" as the landmark of Wittgenstein's philosophical change. Moreover, he thought that the concept is far-reaching, covering the whole psychological fields.
2. Researchers have not responded to Hilmy's claim so far. Their silence is probably due to the following difficulty: in Wittgenstein's published books the term "metalogical" appears only three times, while Hilmy made extensive use of Wittgenstein's unpublished materials (Nachlass) and drew his claim from the occurrence of the term found there. To evaluate Hilmy's claim, therefore, one has to check the Nachlass thoroughly.
3. The release of the database *Wittgenstein's Nachlass The Bergen Electronic Version* in 2000 changed the situation. We can scrutinize the term "metalogical" and its derivatives with ease now. This paper is the result of such an investigation.
4. The database search returns 37 occurrences of "metalogisch" and its inflections. As many of the passages containing the term are duplicates or minor variants, we can group them into ten remarks.
5. The chronologically first passages in each of these ten groups are:
 MS 110-160 (1931), MS 110-189 (1931), MS 110-191 (1931), MS 110-194 (1931), MS 153a-159v (1931), MS 113-049v (1931-2), TS 212-810 (1932?), TS 213-003 (1933?), MS 114-027 (1933?), and MS 116-002 (1936?).
6. From the investigation of these remarks, we have the following results.
 - a) Wittgenstein was concerned about "metalogical" between 1931 and 1933 or 34. Remarks of MS 116 in 1936(?) are already retrospective comments.
 - b) His stance to the "metalogical" idea is always negative.
 - c) The application of the concept "metalogical" is rather specific, it does not cover all psychological concepts as Hilmy imagined. For example, the problems of other minds and of aspect-change do not have to do with the "metalogical".
 - d) In my evaluation, the concept "metalogical" can be best understood on the analogy of transcendental logic in Kantian sense. In other words, *Tractatus Logico-Philosophicus* can be read as a version of transcendental logic.
 - e) Wittgenstein was emancipated only gradually from the attraction of the "metalogical". For example, *Philosophical Remarks* remains within the "metalogical" framework.